

特別講演会 ぐんま県民カレッジ連携講座 開催報告

東日本大震災・災害復興シンポジウム

～その時 現場では何がおこっていたのか 小名浜ときわ苑では～
被災地の経験から学ぶこと そして 私たちにできることとは・・・

事業概要

その時、現場では何がおこっていたのか ～介護老人保健施設 小名浜ときわ苑では～

小名浜ときわ苑は、東日本大震災にともなう断水、建物の損壊や施設内スペースの制約、風評被害に起因する食料など物資全般の不足といった諸般の状況に対応するため、千葉県鴨川市への集団避難を経験しました。前橋市社会福祉協議会は中核市災害時相互応援協定に基づき、いわき市に救援物資の搬送や職員派遣、また海岸に放置されている大量のがれき撤去等を行ってきました。

今回、被災地の経験から学ぶべきこと、そして私たちに何ができるのかをテーマに被災地いわき市の介護老人保健施設小名浜ときわ苑、前橋市社会福祉協議会の協力を経てシンポジウムを開催いたしました。市民の方々、福祉、医療関係者の方々に伝えることで、それぞれの現場における備えを考える機会となったことと思います。

平成 23 年 11 月 19 日 (土)

- ▶ 対象／一般市民 福祉 医療関係者
- ▶ 場所／群馬医療福祉大学 昌賢アリーナ
- ▶ 受講料／無料
- ▶ 時間／ 13:00 ～ 14:30
- ▶ 参加者／ 220 名



被災直後の様子を説明する
上遠野さん(左端)

上遠野さんは「爆弾が落ちたような大きな音とともに施設全体が揺れ出し、立っていられない状態だった」と震災当日について話した。地震翌日からは水が止まり、食料や燃料などの確保に悩まされたという。

原発事故が明らかになった後は窓を閉め切るようになり、室内の環境は悪化。3月21日からは施設全体が千葉県鴨川市へ集団避難した。

施設の改修工事は現在も続いており、上遠野さんは「災害に備えて食料の備蓄や避難訓練、ネットワークづくりを大切にしてほしい」と訴えた。

いわき市内などで支援活動に取り組んだ前橋市社会福祉協議会の高山弘毅さんは、ボランティアを受け入れる職員を事前に現地に派遣して調整する方法が被災地で「前橋方式」と呼ばれていることを紹介。支援については、「作業効率よりも、現地の人をしっかりと見つめて考えることが大切」と話した。

シンポジウムは、ぐんま県民カレッジ連携講座で、同大の公開講座の一環として開かれた。

災害復興シンポ

「前橋方式」に評価 効率より現地の声を

被災地での経験や支援の在り方などをテーマにした「東日本大震災 災害復興シンポジウム」が19日、前橋市川曲町の群馬医療福祉大で開かれ、福島県いわき市の介護老人保健施設「小名浜ときわ苑」の上遠野美恵さん(55)ら5人が地震直後の状況や復興への取り組みなどについて講演した。